



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

SNSコミュニティにおける1型糖尿病患者の病気の受け入れに影響する要因

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 植,美乃里, 竹鼻,ゆかり メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/159779

SNS コミュニティにおける 1 型糖尿病患者の病気の受け入れに影響する要因

植 美乃里^{*1}・竹 鼻 ゆかり^{*2}

養護教育分野

(2020 年 6 月 24 日受理)

UE, M. and TAKEHANA, Y.: Factors affecting type 1 diabetes patient acceptance of disease in the SNS community. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Division of Arts and Sports Sciences., 72: 143-150. (2020) ISSN 2434-9399

Abstract

[Background] In order for SNS to be used as a place for peer support among peers with the same disease. It is necessary to clarify the effects of interaction in the SNS community.

[Purpose] This study was designed to clarify the use of SNS in SNS communities and the factors that affect the acceptance of illness in SNS communities.

[Method] We conducted a questionnaire investigation of web sites for 1 diabetes patient group IVOX on Facebook. The contents of the survey include gender of basic attributes, age of onset, age of community affiliation, type of SNS used daily, number of affiliations of other type 1 urinary illness SNS communities, and factors affecting SNS communities.

[Result] By factor analysis, factors of the SNS community were “management of illness,” “encouragement from members,” “friends,” and “increased positive emotions,” “self-understanding”. Factors influencing, the factors of the SNS community that affect “acceptance of disease” were “management of positive mind” ($\beta = .36$, $p < .001$) and “increased positive emotion” ($\beta = .52$, $p < .001$) and “self-understanding” ($B = .14$, $p < .001$). (Adjusted $R^2 = .68$)

[Conclusion] Effective use of SNS to help patients with type 1 diabetes manage their illness, embrace the disease, and improve their quality of life depends on managing the illness, increasing deterministic sentiment, the necessity of using ideas and creating a use system that enhances the experience of “immediate solution” was suggested.

Keywords: Type 1 diabetes, SNS community, disease acceptance

Department of School Health Care and Health Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 背景: 同じ病気を抱える仲間同士のピアサポートが行われる場として SNS が活用されるためには, SNS コミュニティでの交流がもたらす効果について明らかにする必要がある。

目的: 本研究の目的は, SNS コミュニティにおける 1 型糖尿病患者の病気の受け入れに影響する要因を明らかにすることである。

*1 府中市立府中第二小学校 (183-0006 東京都府中市緑町 1-29)

*2 東京学芸大学 養護教育講座 養護教育分野 (184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1)

方法：Facebookの1型糖尿病患者グループiVOXに対し、Webアンケートを用いた調査を行った。調査内容は基本属性性別、発症年齢、コミュニティ所属年数、日常に利用しているSNSの種類、他の1型糖尿病SNSコミュニティの所属数、SNSコミュニティの影響要因等である。

結果：因子分析により、「SNSコミュニティの要因」は、「病気の管理」、「メンバーからの励まし」、「仲間意識」、「肯定的感情の高まり」、「自己理解」の5因子を得た。重回帰分析の結果、「病気の受け入れ」に影響を及ぼすSNSコミュニティの要因は「病気の管理」($\beta = .36, p < .001$)、「肯定的感情の高まり」($\beta = .52, p < .001$)、「自己理解」($\beta = .14, p < .001$)であった。(調整済み決定係数は $R^2 = .68$)

結論：1型糖尿病患者が病気を管理し病気を受け入れ、QOLの向上につながるように効果的にSNSを利用するには、「病気の管理」、「肯定的感情の高まり」、「自己理解」の経験が充実するような利用の工夫や利用体制づくりの必要性が示唆された。

キーワード：1型糖尿病、SNSコミュニティ、病気の受け入れ

1. はじめに

近年、ソーシャルネットワーキングサービス（以下SNS）が普及し、利用者の社会活動範囲を広げるツールとなってきたなか、様々な病気を抱える人々のコミュニティサイトも多く存在し、患者の新しいつながりの場となりつつある。特に慢性疾患である1型糖尿病患者は病気と長く付き合っていく必要があるため、自らの経験を語り合い知識共有や情報交換を行う場としてサード・プレイスであるSNSが活用されている¹⁾。コミュニティ内では日々の生活の共感や励まし等のピアサポートが見られ、患者が仲間とのつながりを感じることで孤独感を解消し、病気を受け入れる手立てとなっている³⁾。そこで、SNSコミュニティ内でのSNSの特性を生かしたピアサポートが孤独感を解消し患者の自己効力感を高めることで、病気の受け入れの促進をもたらすことを明らかにできれば、SNSを活用した効果的な患者の交流の場が期待できる。

1型糖尿病は有病率が13.53（/10万人）発症率が2.25（/10万人年）⁴⁾と患者数が少なく自分の身近に同病者が存在しない場合が多い。また日々の多忙な生活の中で血糖コントロールや低血糖対応といった病気の管理に追われているため、病気の日常管理への負担感の他に理解者や支援者がいないことへの不満が高まりやすい⁵⁾。糖尿病患者の患者会についての先行研究にあるように実際は仲間とつながりたいと思っていても機会や場所もなく、孤独感を感じている患者も多くいる⁵⁾。そのため、患者会は患者の孤独感解消や情報交換を行う場として従来活用されてきた。近年ではSNSが患者会の役割を担いつつある。

一方、1990年代に登場したSNSは、オンライン上で参加者のSNS上の社会生活の共感をベースとして社会活動を広げるツールであり、1型糖尿病患者にとって

患者会に代わるコミュニティであるとともに、ピアサポートの役割を担っていることが推測される。SNSコミュニティではグループのメンバーから病気に関する有益な情報をもらったり、自身の投稿に励ましや共感のコメントをもらったりといった様々な交流が行われている。またSNSコミュニティに参加していることで1人ではないという仲間意識や所属感を感じることもできる。実際に患者同士で対面する患者会と違いオンライン上で手軽につながりやりとりをすることができるため、気軽に参加できるというSNS特有のメリットもある。そこで患者たちはSNSコミュニティを上手く活用して、病気との付き合い方や自己管理のヒントを得ることや孤独感の解消等を期待してSNSに参加することで、病気を受け入れようとしている。

一方、ピア（peer）とは、社会的、法的に地位の等しい人、同等者、仲間を言い、中でも医療・福祉領域では同じ病気にかかっている、あるいは同じ身体障害をもっている同士と規定される⁴⁾。諸外国の医療分野においては、ピアサポートを病者のもつソーシャル・サポート資源の重要な1つと位置づけている。このピアサポートプログラムは医療・保健の専門家が、Self-help Groupなどに所属する似た病の体験をもつピア・サポーターと協働して、病に苦しむ患者に対しサポート介入を行うものとして積極的に導入されており、プログラムに参加した病者のサポートを受ける側、与える側双方の精神面やQOLによい影響を与えることが報告されている⁵⁾。先行研究により病者のピアサポートは、病者の同病者を支える役割意識、闘病への励み客観的な病状認識、共感に関するものが多く、同病者と病気の体験を共有することの重要性が示唆されている⁵⁾。前述のSNSコミュニティは、患者にとって現代のピアサポートのツールとなっていることが推測される。実際に患者によるSNSコミュニティの中ではメン

バーの経験から学びや情報を得たり、励ましや応援の言葉がけをもらったりするようなピアサポートと同様のやりとりが行われている。

ところで、SNS コミュニティでのこれらの活動は、自己効力感を構成する 4 つの概念をもとに考えることができる。つまり、メンバーの成功体験から自分も病気の管理やコントロールに役立てた経験は「遂行行動の達成」、メンバーの体験談を自分に置き換えて学びを得る経験は「代理的体験」、メンバーからの励ましの言葉がけは「言語的説得」、コミュニティに所属していることで感じる連帯感等は「情動的喚起」ととらえることができる⁶⁾。SNS コミュニティはこの 4 つの役割をはたしていることが推測され、患者の病気の管理に関する自己効力感の高まりや病気の受け入れに役立っている可能性がある。そのため、SNS コミュニティの効果を自己効力感の構成概念でとらえることが出来れば、病気の管理や病気の受け入れに関する有効な活用が見出され、患者の QOL の向上が見込まれることが期待される。

以上より本研究の目的は、SNS コミュニティにおける 1 型糖尿病患者の病気の受け入れに影響する要因を自己効力感の概念を用いて、明らかにすることである。

2. 方法

2. 1 対象と方法

Facebook の 1 型糖尿病患者グループ iVOX に対し、Google フォームの WEB アンケートを行った。有効回答・分析対象数は 78 人、調査期間は 2019 年 11 月であった。

2. 2 調査内容

基本属性は、性別、年齢、勤労状況、同居家族、発症年齢、コミュニティ所属年数、日常に利用している SNS の種類、他の 1 型糖尿病 SNS コミュニティの所属数とした。

SNS コミュニティの要因については自己効力感の 4 つの構成概念⁹⁾をもとに「遂行行動の達成」は、血糖コントロールや食事運動といった糖尿病の基本管理を含めた 8 項目（4 件法）、「代理的体験」は血糖コントロールや食事運動に関するメンバーの体験をさく等の 8 項目（4 件法）で構成した。「言語的説得」は SNS 上でメンバーから励まされるといった 5 項目で構成した。「情動的喚起」は病者のピアサポートに関する先行研究³⁾を参考に仲間と所属の 2 つに分けた。仲間では SNS 上でのメンバーとのやりとりなどの日常的な活

動を経験したことによる気持ちの変化についての 8 項目（4 件法）、集団ではコミュニティに所属していることによる気持ちの変化についての 4 項目（4 件法）から構成した。また、自己効力感についても「糖尿病とうまく付き合っていく自信はあるか」という 1 項目（4 件法）で回答を求めた。

「病気の受け入れ」に関する項目としては精神面と行動面の両面から考え、3 項目（4 件法）とした。

各項目とも「よくある（よく思う）」「時々ある（時々思う）」「あまりない（あまり思わない）」「ほとんどない（ほとんど思わない）」の 4 件法で回答を求めた。4 件法の各項目の得点が高くなるほど認識があるように設定した。

2. 3 分析方法

変数間の関係は全変数について記述統計量を求めた。次に変数を得点化するために因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行い、信頼係数を求めた。性差及び勤労状況による差と各変数の関係は独立した t 検定を用いた。病気の受け入れと変数の関係は、Pearson の積率相関係数を算出した。病気の受け入れと各変数の関係性を検討するため、重回帰分析を行った。

これらの分析には、統計ソフト SPSS ver25.0 を使用した。有意水準は 5% を採用した。

3. 倫理的配慮

調査にあたっては、対象者から得た情報は研究以外には使用しないこと、研究者以外のものが用いることはないこと、アンケートから得たデータは統計的に処理され、個人が特定されることはないことをアンケートの冒頭に文書で説明した。なお、本人からの無記名による回答返信によって、研究の同意と参加への意思が得られたものとみなした。研究の実施にあたり、東京学芸大学倫理審査委員会の承認（東学芸研支第 321 号）を得た。

4. 結果

4. 1 基本属性と対象者の分布

対象者の属性は表 1 に示すとおり、性別は女性が約 6 割、勤労状況は勤労中が最も多く約 8 割だった。年齢は平均 47.56 ± 10.10 歳、発症年齢は平均 32.41 ± 14.40 歳、発症経過年数は 15.0 ± 13.32 歳であった。SNS の利用状況は表 2 に示すとおり、コミュニティ所属年数は半年未満が約 1 割、半年～1 年が約 1 割、2

表1 対象者の属性 (n=78)

項目	回答	人数	%
性別	男性	34	43.6
	女性	44	56.4
勤労状況	勤労中	62	79.5
	学生	3	3.8
	無職	13	16.7
コミュニティ 所属年数	半年未満	9	11.5
	1年～2年	10	12.8
	2年～3年	12	15.4
	3年以上	47	60.3
他所属 SNS	0	18	23.1
コミュニティ数	1	18	23.1
	2	23	29.5
	3	7	9
	4	4	5.1
	5	8	10.3
		平均値	(標準偏差)
年齢		47.56	(± 10.10)
発症年齢		32.41	(± 14.40)
経過年		15.15	(± 13.32)

表2 日常利用 SNS (n=78)

項目	あり		なし	
	人数	%	人数	%
twitter	35	44.9	43	55.1
Snapchat	0	0	78	100
LINE	71	91	7	9
mixi	9	11.5	69	88.5
ameba ブログ	18	23.1	60	76.9
Google +	7	9	71	91
その他	2	2.6	76	97.4

～3年が約2割、3年以上が約6割であった。日常的に利用している SNS については表2に示す通り、LINE が1番多く約9割、続いてtwitterが約4割で、コミュニティメンバーの大半がFacebook以外のSNSも日常的に利用していた。iVOX以外に所属しているコミュニティの数は2つが1番多く約3割だった。

4. 2 「SNS コミュニティの要因」の因子分析

表3に示すとおり、SNS コミュニティの影響要因30項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、6因子が抽出された。6因子目でうまく説明できなかったため5因子指定で再び因子を抽出したところ、解釈可能な5因子を得た。第一因子は「(コミュニティメンバーの経験を聞いたことにより) 自分も低血糖対応が出来そうだった。」など14項目から成る「病気の管理」、第2因子は「(あなたの投稿やコメントに対して) メンバーから共感される。」など5項目から成る「メンバーからの励まし」、第3因子は「(コミュニティ内でメンバーとやりとりをすることにより) 一人でないと思う」など4項目から成る「仲間意識」、第4因子は「(コミュニティ内でメンバーとやりとりをすることにより) 自分の思いを発散できた」と

表3 「SNS コミュニティの要因」の因子分析 (主因子法)

(n=78)

	病気の管理	メンバーからの励まし	仲間意識	肯定的感情の高まり	自己理解
注射や薬の選択に役立った	0.84	0.19	-0.03	-0.27	-0.11
自分も注射や薬の選択ができそうだった	0.82	0.09	-0.12	-0.13	-0.05
自分も血糖コントロールができそうだった	0.77	-0.07	-0.24	0.12	0.05
自分も低血糖対応ができそうだった	0.76	0.03	-0.23	0.05	-0.01
自分も病気を理解できそうだった	0.76	-0.01	0.42	-0.20	-0.01
自分も医療者と上手く関わることができそうだった	0.75	0.01	0.03	0.02	-0.28
低血糖時の対応に役立った	0.74	-0.07	-0.07	0.06	0.05
自分も運動の工夫ができそうだった	0.70	-0.07	0.02	0.16	0.11
運動の選択に役立った	0.70	-0.04	0.00	0.06	0.15
自分も食事の工夫ができそうだった	0.69	-0.06	0.03	0.19	0.13
食事の選択に役立った	0.65	-0.05	0.12	-0.09	0.13
医療者との関わりに役立った	0.65	0.16	-0.15	0.10	-0.18
病気の理解が深まった	0.60	-0.01	0.40	-0.12	-0.02
血糖コントロールに役立った	0.54	0.07	-0.03	0.16	0.26
メンバーから応援の言葉がけがある	-0.04	0.90	0.05	0.04	0.02
メンバーからの励ましがある	0.07	0.88	0.10	-0.61	-0.03
メンバーから成功を認める言葉がけがある	0.02	0.80	-0.01	0.10	0.06
メンバーから共感される	-0.05	0.79	-0.05	0.04	0.09
メンバーからの慰めがある	0.06	0.67	0.02	0.07	-0.14
メンバーとやりとりすることで仲間がいると思う	-0.10	0.07	0.87	0.07	-0.01
コミュニティに所属していることで仲間がいると思う	0.14	0.01	0.85	0.12	-0.01
一人ではないと思う	0.10	0.04	0.85	-0.04	0.12
安心する	0.04	-0.03	0.62	0.26	-0.10
自分の思いを発散できたと感じることがある	0.10	0.09	0.06	0.77	-0.05
自分の経験している悩みや苦しみを分かってもらえたと感じる	0.03	0.15	0.10	0.71	0.05
孤独感から解放されたと感じることがある	0.09	-0.11	0.25	0.67	-0.13
自分も頑張ろうという気持ちになったことがある	0.09	0.19	-0.02	0.64	0.08
自分自身について客観的にみられると感じたことがある	0.40	-0.24	0.01	0.43	-0.11
メンバーに理解されていないと思う	0.08	-0.08	0.12	-0.11	0.79
自分の事をうまく伝えられないと思う	0.05	0.09	-0.07	0.02	0.77

感じることもある。」など4項目から成る「肯定的感情の高まり」、第5因子は「(コミュニティに所属している中で) メンバーに理解されていないと思う」など2項目から成る「自己理解」と命名した。

尺度の信頼性を示す α 係数は「病気の管理」が $\alpha = .94$, 「メンバーからの励まし」 $\alpha = .92$, 「仲間意識」が $\alpha = .89$, 「肯定的感情の高まり」が $\alpha = .85$, 「自己理解」が $\alpha = .77$ であり, 十分な信頼性があると判断し, 変数として得点化し分析に用いた。

4. 3 「病気の受け入れ」の因子分析

病気の受け入れに関する3項目「(SNSコミュニティで得た情報が) 糖尿病と付き合うことに役立った。」「自分も糖尿病と付き合うことができそうだった。」「病気を受け入れることができたと感じることがある。」について因子分析をした結果、表4のように1因子となり α 係数は $\alpha = .77$ であり、使用可能な変数と判断した。

表4 病気の受け入れの因子分析 (主因子法) (n=78)

自分も糖尿病と付き合うことができそうだった。	0.70
(SNSコミュニティで得た情報)が糖尿病と付き合うことに役立った。	0.71
病気を受け入れることができたと感じることがある。	0.68
平均値 ± 標準偏差	9.50 ± 2.18
α 係数	0.77

4. 4 属性別の比較

各変数と属性による比較を行った。表5に示すとおり勤労状況において、「自己理解」のみ有意であった。性別では有意な差はなかったため、以後一括して分析を行った。

4. 5 相關

表6に示すとおり、「病気の受け入れ」と各変数の相関については、4項目で有意な相関があった。共線性の診断をしたところ、「メンバーからの励まし」の項目で共線性の可能性があったため、「メンバーから

の励まし」を外し「病気の管理」「仲間意識」「肯定的感情の高まり」「自己理解」「年齢」を独立変数として分析を行った。

表6 病気の受け入れと各変数の相関 (n=78)

項目	Pearson の相関係数	P 値
SNS コミュニティ		
病気の管理	0.68	< .001
メンバーからの励まし	0.21	0.067
仲間意識	0.57	< .001
肯定的感情の高まり	0.76	< .001
自己理解	0.28	0.012
自己効力感	0.16	0.159

4. 6 病気の受け入れに影響する要因

SNSコミュニティにおける病気の受け入れの影響要因について表7に示す通り、病気の受け入れを従属変数、「病気の管理」「仲間意識」「肯定的感情の高まり」「自己理解」「自己効力感」「年齢」を独立変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った。投入された変数は「病気の管理」「仲間意識」「肯定的感情の高まり」「自己理解」「年齢」の5つで、「病気の管理」「肯定的感情の高まり」「自己理解」の3項目で関係性が見られた。つまり、「病気の管理」ができるほど、「肯定的感情の高まり」があるほど、「自己理解」が進むほど、「病気の受け入れ」が高かった。このモデルの調整済み決定係数は $R^2 = .68$ ($p < .001$)であり、病気の受け入れの分散の68%がこれらの5変数で説明されることが示された。

表7 病気の受け入れに影響するSNSコミュニティの要因（重回帰分析）（n=78）

	標準化されていない係数	標準化係数	t	P 値
	B	標準誤差	ベータ	
病気の管理	0.09	0.02	0.36	4.92 < .001
仲間意識	0.16	0.07	0.19	2.37 0.02
肯定的感情の高まり	0.24	0.06	0.52	4.36 < .001
自己理解	0.16	0.09	0.14	1.85 < .001
年齢	-0.02	0.01	-0.08	-1.20 0.24

*「病気の受け入れ」に影響を及ぼす要因における重回帰分析によるモデルの有意性は、 $F(5.72) = 104.23$ 調整済み $R^2 = .68$ ($p < 0.001$) であった

表5 勤労による変数の得点比較（一元配置の分散分析）

項目	勤労中 (n = 62)			学生 (n = 3)		無職 (n = 13)		P 値
	満点	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
SNS コミュニティの要因								
病気の管理 (14 項目)	56	40.98	± 9.78	47.00	± 2.65	38.62	± 7.52	0.36
メンバーからの励まし (5 項目)	20	14.50	± 4.14	16.00	± 1.73	14.77	± 3.92	0.81
仲間意識 (4 項目)	16	13.84	± 2.58	14.33	± 1.53	13.54	± 3.23	0.88
肯定的感情の高まり (4 項目)	20	15.35	± 3.27	15.33	± 3.06	13.54	± 5.04	0.26
自己理解 (2 項目)	8	6.02	± 1.57	6.00	± 1.00	4.54	± 1.66	< 0.01
病気の受け入れ (3 項目)	12	9.63	± 2.11	10.67	± 1.16	8.62	± 2.50	0.20
自己効力感 (1 項目)	4	3.19	± 0.72	3.00	± 0.00	3.23	± 0.60	0.87

5. 考察

本研究は自己効力感の4つの構成概念をもとにSNSコミュニティにおける患者の自己効力感を促す構成概念を再構し、SNSコミュニティが与える病気の受け入れの影響要因について明らかにした。

その結果、「病気の管理」ができるほど、「肯定的感情の高まり」があるほど、「自己理解」が進むほど、「病気の受け入れ」ができる可能性が示唆された。

以下では、本研究により明らかになったSNSコミュニティの因子構造の妥当性と、SNSコミュニティにおける1型糖尿病患者の病気の受け入れに影響する要因に焦点を当てて考察する。

5. 1 SNSコミュニティの因子構造の妥当性

まず、SNSコミュニティの影響要因の5因子構造について自己効力感を構成する4つの概念に基づいて述べる。

SNSコミュニティの影響要因は「病気の管理」「メンバーからの励まし」「仲間意識」「肯定的感情の高まり」「自己理解」の5因子構造となった。「病気の管理」は、低血糖対応や血糖コントロール、食事や運動の工夫、医療者との関係づくりなどの項目から成る。自己効力感を高める要因のひとつである遂行行動の達成は、自分自身が何かを達成した、何かを成功させたという経験、代理的体験は自分以外の人で達成した、成功したのを観察した経験である⁶⁾。SNSコミュニティにおいては、SNSでの気軽なやり取りや投稿の中で、メンバーの体験談を知り実際に血糖コントロールに役立てたり自分も食事の工夫ができたりするという気持ちの高まりがあった経験に対応する。つまり、遂行行動の達成と代理的体験は1型糖尿病患者の血糖コントロール等の重要な自己管理の項目であり⁷⁾、「病気の管理」としてまとめられる。「メンバーからの励まし」は、言語的説得にあたる項目としてとらえることができる。自己効力感の要因の言語的説得とは、自身に遂行する能力があることを言語で説明されることである⁶⁾。SNSコミュニティにおいては、自身の投稿や発言に対するメンバーからの共感や応援、慰めや励ましなどの言語的コミュニケーションに対応している。よって、言語的説得として設定した項目は「メンバーからの励まし」としてまとめられる。「仲間意識」「肯定的感情の高まり」「自己理解」は、情動的喚起にあたる項目である。自己効力感の要因の情動的喚起は、感動体験等の生理的反応を得ることである⁶⁾。SNSでやりとりすることやコミュニティに所属していることに

より一人でないと思う仲間がいると思う等の項目は、コミュニティに所属する中で生まれる「仲間意識」としてまとめられる。実際のやりとりを通して自分の思いの発散や、客観的に自己を見つめる、孤独感からの解放や悩みや苦しみの共有など、気持ちの変化として「肯定的感情の高まり」としてまとめられる。メンバーからの理解や自己表現など、自分を理解しているかどうかは「自己理解」としてまとめられる。つまり、5つの変数はいずれも自己効力感の構成概念で説明できる。

5. 2 SNSコミュニティにおける病気の受け入れに影響する要因

SNSコミュニティでは「病気の管理」「肯定的感情の高まり」「自己理解」の3つが病気の受け入れに影響を与えていた。

「病気の管理」に関する成功経験が多い人ほど病気の受け入れができているという結果については、病気の管理にプラスの影響を受けていることで実際の管理がうまくいき、病気をある程度コントロールできていると感じるために受け入れの気持ちも高まるのではないかと推測される。思春期の1型糖尿病患者の自己管理を検討した研究では⁵⁾、患者が体調の変化や生活の変化に合わせたコントロール方法を確立することで病気を受け入れながら成長していくということが明らかになっている。思春期以降も就職や結婚といったライフスタイルの変化はあり、その中で自身にあった病気の管理をメンバーの経験から得た学びにより確立することで、病気の受け入れが進むといえる。

また、「肯定的感情の高まり」の経験が多い人ほど病気の受け入れが出来ているという結果については、SNSでのつながりにより病気に対するマイナス感情の軽減や肯定的にとらえるきっかけにより病気自体についても肯定的にとらえ受け入れにつながっていると推測できる。先行研究にもあるように、病者にとってSNS上で自身の体験を共有し互いに励ましあう活動は、SNSのつながりやすさや手軽さといった特性により可能になっている²⁾。1型糖尿病の中・高校生における学校生活における学生生活の充実度に影響を及ぼす心理社会的要因を明らかにした研究では、病状や病気に対する感情に加え、情緒的に支援してくれる者の存在が影響を及ぼすと指摘されており⁸⁾、今回の対象となった勤労中の年齢層にとって、支援者となつた場としてSNSコミュニティが機能しているといえる。

「自己理解」の得点が高い人ほど病気の受け入れができているという結果については、自身を表現できた

りメンバーから理解されたりしているという気持ちが病気を受容する気持ちを高めると推測される。

また関連が見られなかった「仲間意識」「メンバーからの励まし」について考察する。

「仲間意識」については、SNS 上でのやり取りや SNS コミュニティに所属する事で孤独感の解消等安心感を得る効果が期待できる。また、対象の約 9 割がコミュニティに所属することによって一人でない等の所属による安心を感じていると推測される。しかしあくまでオンライン上でのつながりであり、実際の患者会の直接の交流や対面するコミュニケーションに比べると、仲間ととらえるには弱いつながりであるため、影響しなかった可能性がある。

SNS 上での「メンバーからの励まし」は、言語的説得により病気と付き合う自己効力感への効果が期待できる。メンバーに認めてもらう等の経験は自己管理の負担感や孤立感も緩和していると推測できる⁸⁾。しかし、病気を受け入れることは、人から励まされて進むという単純なことではないため、今回は影響しなかったといえる。

本研究により、SNS を用いて 1 型糖尿病患者の病気の受け入れを促すためには、SNS コミュニティでの「病気の管理」に関する体験を積極的にきく、「肯定的感情の高まり」につながるように 1 つのコミュニケーションツールとして気軽に SNS コミュニティを利用する、「自己理解」がすすむように自分の体験を投稿してみる等の利用の工夫をする事が効果的であると示唆された。同時に SNS コミュニティは患者会の役割を完全に代替することはできず、直接コミュニケーションをとることのできる同病者との交流は少なからず必要であるといえる。オンラインとオフラインを上手く併用し、自身のライフスタイルに合わせて SNS コミュニティを利用することが重要であるといえる。本結果は、1 型糖尿病患者にとって効果的な SNS コミュニティの利用に視座を与えるものである。

6. 本研究の限界と今後の課題

本研究は Facebook の 1 型糖尿病コミュニティ (iVOX) に焦点を当て、SNS コミュニティにおける 1 型糖尿病患者の病気の受け入れの影響要因を自己効力感の構成概念を用いて明らかにした。今現在 SNS コミュニティの効果を明らかにした研究は少なく、本研究が SNS コミュニティだけに強く影響されたものであるかは明らかでない。また対象は 40 ～ 60 代の中老年層が大半であるため、すべての年齢層を反映した結果

でないことが限界である。今後若手の SNS コミュニティを対象としたり、より SNS の特異性を反映した調査項目にすることで、より病気の受け入れに影響する SNS コミュニティの特徴を明らかにすることができ、1 型糖尿病患者が SNS コミュニティをより有効的に活用する一助とするための示唆を得ることができる。1 型糖尿病患者を始めとして様々な慢性疾患で SNS コミュニティの有効活用が推進するように、今後は対象の幅を広げて一般化を図ることが必要である。

7. 結論

本研究は Facebook の 1 型糖尿病患者コミュニティ (iVOX) に焦点を当て、自己効力感の 4 つの構成概念をもとに患者の自己効力感を促す構成概念を再構し、SNS コミュニティが与える病気の受け入れの影響要因を明らかにした。1 型糖尿病の受け入れに影響を及ぼす SNS の要因は「病気の管理」「メンバーからの励まし」「肯定的感情の高まり」「仲間意識」「自己理解」の 5 つに分類された。また、1 型糖尿病患者が病気を管理し病気を受け入れ、QOL の向上につながるように効果的に SNS を利用するには、「病気の管理」、「肯定的感情の高まり」、「自己理解」の経験が充実するような利用の工夫や利用体制づくりの必要性が示唆された。

付記

本研究は、令和元年度 (2019 年度) 基盤研究 (C) (一般)「病気の子供を包摂する学びとケアの共同体づくりのための教員研修プログラムの開発 (課題番号 19K02595)」(代表 竹鼻ゆかり) 科学研究費の成果の一部として、令和元年度 (2019 年度) 植美乃里執筆の卒業論文を加筆修正し執筆したものである。

引用文献

- 1) 荒牧英治, 四方朱子, 富井美子ほか: SNS は患者の Quality of Life を向上させるのか, 医療情報学 36 (1), 17-23, 2016
- 2) 高谷邦彦: サード・プレイスとしての Twitter—子育て主婦 ユーザの場合—, 名古屋短期大学研究紀要, 57, 1-13, 2019-03-16, 名古屋短期大学
- 3) 小野美穂, 高山智子, 草野恵美子ほか: 病者のピア・サポートの実態と精神的健康との関連—オストメイトを対象に一, 日本看護科学会誌, 27, 4, 23-32, 2007
- 4) 厚生労働科学研究成果データベース: 1 型糖尿病の実態調

査, 客観的診断基準, 日常生活・社会生活に着目した重症度評価の作成に関する研究

Available at: <https://mhlwgrants.niph.go.jp/niph/search/NIDD00.do?resrchNum=201508012A>. Accessed January 4, 2020

- 5) 藏重麻美, 藤崎彩花, 牧野裕美子ほか: 1型糖尿病患者の自己管理に関する検討～思春期の過ごし方がその後の自己管理に与える影響について～, 山口県立大学学術情報, 10, 129-138, 2017
- 6) 福田吉治: 第2章G 個人レベルの理論・モデルに関する基本概念 1 自己効力感, 健康行動理論による研究と実践, 一般社団法人日本健康教育学会 編, 52-53. 医学書院, 東京, 2019

- 7) 国立国際医療研究センター糖尿病情報センター: 1型糖尿病の治療について

Available at: <https://dmic.ncgm.go.jp/general/about-dm/050/020/02.html>. Accessed January 8, 2020

- 8) 竹鼻ゆかり, 朝倉隆司, 高橋浩之ほか: 1型糖尿病における学校生活の充実に関する心理社会的要因, 学校保健研究, 51: 395-405, 2010
- 9) 村上美華, 梅木彰子, 花田妙子ほか: 糖尿病患者の自己管理を促進および阻害する要因, 日本看護学研究会雑誌, 32(4), 29-38, 2009